

野田市立興風図書館所蔵和古書についての研究*

細野美里（学籍番号 200621334）

研究指導教員：綿抜豊昭

1. はじめに

野田市立興風図書館は、千葉県の北西部に位置する野田市の中央図書館で、その歴史は古く、大正10年に有志の青年団体である野田戊申会の会員が設立した野田戊申会簡易図書館が始まりとされている。野田市立興風図書館では、まとまった数の和古書を所蔵しているにも関わらず、調査及び整理が行われていないため、どのような資料を所蔵しているのかわからない状態となっている。そこで、その和古書について調査をし、蔵書の特性をあきらかにすることを研究の目的とした。併せて、蔵書を通覧できる目録を作成することとする。調査対象は、未整理の和古書440点(合冊も含む)、1,483冊である。

2. 調査方法

2.1 調査手順

調査対象決定後、調査項目を確定し、調査シートを作成を行う。撮影許可を得た資料の撮影を行い、画像データを取得する。そして、原資料を一点ずつ調査し、調査シートに項目毎に記入していく。その後、参考目録を調査し、調査結果の分析を行った後、目録作成を行う。

2.2 調査項目

調査項目として採用したのは、①写本・刊本の別、②書名、③著者名等、④巻数(残欠)、⑤冊数、⑥大きさ、⑦序文・跋文、⑧刊記、⑨来歴(入手先・蔵書印など)、である。また、今回の調査では、見出しの書名として、参考目録中に用いられる書名を統一書名として採用することとした。

3. 調査結果

3.1 参考目録

『国書総目録』及び『古典籍総合目録』に著作が記載されていなかった資料が43点、『日本古典籍総合目録』データベースにヒットしなかった資料は30点であった。冊子体目録とデータベースの両方になかった資料は26点であり、内訳は刊本が16点、写本が10点であった。

3.2 資料の入手時期と入手先

資料の入手時期が判明したのは135点で、そのうち購入が18点、寄贈が117点であった。最も古い時期に入手した資料は、大正10年5月15日に甲田保三郎氏より寄贈された『楽訓』3冊と『和漢事始』4冊であった。

また、260点の資料については来歴の一部が判明した。うち242点は寄贈によって入手したものと考えられる。主な寄贈者は以下の通りである。

- 茂木勇右衛門氏…91点
- 内田忠氏…34点
- 川喜多弥栄氏…25点
- 茂木佐平治氏…24点

それぞれの人物によって寄贈された資料の傾向に特徴があることが判明した。茂木勇右衛門氏は主に浄瑠璃、内田忠氏は和歌・俳諧・歌集などの歌学関係の資料を主に寄贈している。川喜多弥栄氏は文学と思想・神祇関係、茂木佐平治氏は、漢詩・歌集などの文学関係のほか、仏教関係の資料も寄贈している。

また、茂木佐平治氏からの資料には「宙童文庫」の印があり、川喜多弥栄氏からの資料には「佐佐能屋蔵書」の印が多く見られた。「佐佐能屋蔵書」は国学者の小原君雄の蔵書印であるが、両名の関係は不明である。

* “Research of classic Japanese book at Noda public library” by Misato Hosono

3.3 出版地

279 点の資料について、出版地が判明した。江戸が 158 点、大坂が 69 点、京が 37 点、名古屋が 6 点である。四都市で出版されたものは計 270 点であった。四都市以外の、いわゆる地方版と呼ばれるものは 9 点あり、内訳としては、伊勢が 4 点、紀伊が 2 点、阿波が 1 点、信州が 1 点、肥後が 1 点であった。一般に流通していた四都市以外の地方版を所蔵していたと言うのは、蔵書の特性を考える上で注目すべき点である。

3.4 資料の分類

資料の分類としては、浄瑠璃が 132 点、草双紙が 70 点あり、この二種類が全資料の約半分を占めていることがわかった。浄瑠璃には、全編を一冊に収めた丸本、段毎に抜き出して稽古の時に用いた抜本、実際に舞台上で用いる床本があり、132 点の内訳としては、丸本 67 点、抜本 60 点、床本 5 点であった。草双紙については、ほとんどが江戸後期草双紙である合巻であったが、その他に、従来、図書館ではあまり収集されていなかった切附本という資料があることがわかった。浄瑠璃と草双紙以外の資料については、文学・教育・言語・歴史などの資料が多いことがわかった。

4. 蔵書の特性

調査結果により、草双紙の中に切附本が存在することがわかった。切附本は、大量消費されて読み捨てられてきた庶民の読み物であったため、『国書総目録』などにも殆ど掲載されていないジャンルの資料である。草双紙 70 点のうち切附本は 11 点であった。この切附本の存在は、蔵書の特性の一つであると言えるだろう。

さらに、蔵書の特性の一つとして、地域住民から寄贈された資料が多数あった、ということが挙げられる。その中でも、茂木家からの寄贈資料の数が多かったのが特徴的である。茂木家からの寄贈資料は 126 点で、全体の約 30% に当たる。野田市といえば醤油の町として有名であるが、茂木家と言うの

は、醤油醸造に深く関わりのある、野田市における有力者の家系である。野田市立興風図書館は、市に移管される以前は、財団法人興風会図書館であった。財団法人興風会という組織は、茂木家の関連組織であり、興風会が設置母体である財団法人興風会図書館も、茂木家からの寄付や資料の寄贈を受けており、深い繋がりを持っていたことが判明した。資料として浄瑠璃や草双紙が多かったのは、地方の有力者が収集したコレクションが、まとまって図書館に寄贈された結果であると考えられる。個人蔵であったが故に、浄瑠璃の抜本や床本、切附本など、通常の公共図書館では収集しないような資料を所蔵することになったのである。

5. まとめ

野田市立興風図書館所蔵の和古書は、その蔵書の大部分が地域住民の寄贈によってできたコレクションであり、茂木家から寄贈された資料がその中核を担っている。今回、調査を行い、蔵書の特性を考察していく中で、そのような特性を見出すことができたのは、大きな収穫であった。

今回の調査で、資料収集の過程において、図書館が地域住民と密接なつながりがあることが判明した。これは、大学図書館などではみられない、地域に根ざした図書館ならではの特徴であると言える。

主要参考文献

- [1] 鈴木英二：財団法人興風会図書館の五十年。財団法人興風会，1991
- [2] 市山盛雄：野田の歴史。崙書房，1975
- [3] (財)興風会 70 周年誌編集委員会：財団法人興風会七十年史。財団法人興風会，2000
- [4] 長友千代治：江戸時代の図書流通（佛教大学鷹陵文化叢書 7）。思文閣出版，2002
- [5] 高木元：江戸読本の研究—十九世紀小説様式攷—。ペリかん社，1995
- [6] 井上宗雄ほか編著：日本古典籍書誌学辞典。岩波書店，1999